美展

第163回

美展

趣意

「美の想像　～感性のその先へ～」

「美展」が始まった昭和2年（1927）年は、モガと言われる西洋文化の影響を受けたファッションを着こなす女性が登場した時代でした。その「美展」誕生当時から現代に至るまで、様々な流行の影響を受けながら、作り手の方々には個性的かつ斬新な意匠を創出していただいてきました。その根源にあるのは、着物の意匠に対する探究心であり、美しい日本の自然や文化を享受し歩んできた日本人の感性、或いは想像力と言えるでしょう。その豊かな想像力は、一朝一夕に結実するものではなく、創作者の人生観、或いは時代の流行や人間同士のつながりといった様々な要素が積み重なることによって涵養されたものと思います。意匠に込めた作り手の想像性に想いを馳せ、その結実した美を慈しみ、継承していくことが「美展」の理念となっています。

「コロナ禍」と呼ばれる今、私たちの生活において効率性や生産性の概念がより求められるようになりました。しかし、私たちが他者を思いやり、共感し、想像力を働かせることによって、人の心を惹き付け、動かす作品や発明を生み出し発展してきたという歴史は揺るぎないものです。我々は「美展」の理念に基づいた着物作りを追求するとともに、着物そのものの美に触れることで、多くの人たちが着物制作や歴史、作り手の感性に想いを巡らせていただくことを祈念し、今回の美展のテーマを「美の想像～感性のその先へ～」と致します。

主催

京都丸紅株式会社
Kyoto Marubeni Co.,Ltd.

染織美術研究会

京都丸紅「美展」のあゆみ

本年に百六十三回目の開催を迎える染織逸品会「美展」。

昭和・平成・令和の長きにわたり、きもの文化の発展に貢献してきた歴史を振り返ると共に、より一層の研鑽を重ね、新時代にふさわしい作品の創造に邁進する所存でございます。

そして、きものを愛する方々にとってこの「美展」が、今日の染織を形作る豊かな日本文化を発見し、堪能していただける機会となりますことを祈念致します。

大正〜昭和初期
「あかね会」の誕生

鹿島英二（昭和3年）
あかね会・原画

経済・産業界の激動の時代、染織業界も不況にあえぐ中、普遍的な価値を持つ商品の開発を目指す動きが始まりました。

当代一流の日本画家や洋画家へ新しいものの図案を依頼し、「草の葉会」（のちに「あかね会」に組織改編）を開催しました。

昭和2年
第一回「美展」開催

昭和4年
衣裳コレクションの始まり

新しい「きもの美」を追求する「美展」の創設に邁進し、第一回「美展」が「染織逸品会」を銘打って開催されました。

昭和18年
「美展」休会

第二次世界大戦中、「豪奢品等製造販売制限規則」が発令され、豪華な逸品物を排した創作で続けられていましたが、ついに休会に追い込まれたのです。

新装成った丸紅商店京都支店ビル
（1938年竣工）
出典 丸紅通史

昭和24年
「美展」再興

絹、人絹の統制が解除され「美展」は「染織文化展覧会」として6年ぶりに復活しました。

当時の会員が「希望に胸膨らむ思いであった」と記すほど、和装の展覧会に希望が溢れた時期でした。

美展第41回　振袖　尾嶋正三
黒地に松枝を大きく白色に抜いて、梅と松の枝先を赤色で挿し、上前と裾部に華麗な彩色で波と雉を描き出した作品

美展第15回　振袖　中川華邨
配色の色彩を抑えつつ、糸目糊や彩色の緻密さが振袖らしい華やかさを見事に表現している

美展第159回　訪問着　寺谷昇
大胆な取り方の流水柄をベースに、肩部から多色の楓をあしらった逸品

美展第108回　訪問着　弐代 上野為二
伊藤若冲の代表作の一つである「群鶏図」をモチーフに、七宝文様や凜とした雰囲気の梅模様等、脇役の施しにも優れた感性を窺わせる逸品

昭和34年
高度成長期の中で

昭和54年
第百回「美展」開催

皇太子ご成婚をきっかけに、礼装用きもののブームがおこり、「美展」作品は逸品ものとして特選呉服市場の注目を集めました。

昭和58年
美展一般公開

逸品会の伝統と歴史をふまえて、「伝統の美」をテーマに盛大に開催されました。

平成元年〜
弛まぬ歩み

初めて京都市美術館で一般公開、昭和62年に東京でも開催し、広く「美展」が知られるようになりました。

「美展」作家である木村雨山・上野為二・羽田登喜男は重要無形民俗文化財保持者（人間国宝）に認定されています。

令和4年
美展163回
「美の想像〜感性のその先へ〜」をテーマに開催

逸品を生み出す「美展」の伝統は、次の新しい時代へも受け継がれています。

sense+sense

美展第159回　訪問着　坂井洋
椿柄の一部をシルエット風に表現して、ブルーと白のコントラストが映える訪問着

美展第72回　訪問着　上野忠夫
白と黒のモダンな色分けとポイントに金箔をあしらった洋花文様の訪問着

出典「昭和の歩み 美展」

美展

美展とは

染織美の芸術性を追求しつづける「美展」

昭和二年、激動の昭和史とともに産声をあげた染織美術展覧会、略称「美展」。その誕生から一貫して染織技術の保存継承のみならず、きものの美を芸術の域にまで高めることを目指してまいりました。

その試みのため、当世一流の作家、工房、悉皆たちによるきもの創作グループが結成されました。それが美展の礎となり、その志は脈々と受け継がれ、伝統に培われた文化と職人技とが互いに競い合い、そして融合し、きものを芳醇な芸術として昇華してまいりました。斯界最高峰としての地位を示すがごとく、その高い芸術性に人間国宝の称号を得た上野為二・木村雨山・羽田登喜男をはじめとして、きら星のごとく多くの優れた作家たちを美展から輩出しております。

第百六十三回美展におきましては、「美の想像～感性のその先へ～」をテーマに美展の作家たちが新たに挑戦いたします。染織作家たちが描く美展の世界を、ひとときお楽しみください。

あかね会

あかね会とは

「あかね会」とは染織界に新たな意匠を求め、丸紅が結成した芸術家の会です。

『美展』の草創期にあたる昭和の初め、染織界に意匠の革新を図る目的で、竹内栖鳳・堂本印象・伊東深水など日本画を代表する画家をはじめ幅広い芸術家に「染織のための」図案を依頼しました。

その描かれた図案の数々を「草の葉会」と称して発表、これをもとに創作した染織展を東京・日本橋の白木屋で開催したところ、当時の染織界に大反響を呼び、これが京都における『美展』の礎となりました。

後に「草の葉会」は竹久夢二によって「あかね会」と名付けられ、最終的には約七十名もの有名芸術家たちが参加しています。

▲ 小林 重之・作「雪南天」

◀ 原画
北野恒富「夜の雪」
昭和10年

原画 ▶
竹内栖鳳「磯つづれ」
昭和3年

▼ 寺谷 昇・作「自在」

時代衣裳　特別展示

大名家コレクション展

時代を越え、大切に守られてきた
大名家伝来の貴重な時代衣裳。
日本の美意識を反映した意匠の数々を
ご高覧下さい。

所蔵：丸紅株式会社

▲
厚板唐織〆切段蒲公英文唐織
松平家
江戸時代後期

◀ 淡茶縮緬地竹に亀甲文様友禅染小袖
熊本　細川家
江戸時代中期

しなやかさを纏う、きものスタイル

sense + sense

自分の好みのコーディネートに
出会ったことはありますか？

ワンピースを選ぶように、自分の好きな色を
好きな組み合わせで…
シンプルな着物は、幾通りものコーディネートを
生み出します。

時には染帯で…　時にはきちんと袋帯で…

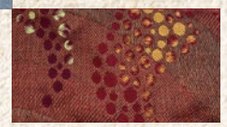
「sense+sense」が
”いま”のきものスタイルとの出会いを約束します

color
design
style

「きもの」を楽しむ。
モダンで知的な「きもの」スタイル。
衿を正し、背筋を伸ばして楚々と歩く。
モダンな空間にもすっと溶け込める
シンプルでひかえめ、身近なお洒落着に。
素材感・色合わせで季節を取り入れ、
日常の中に「和」を楽しんでほしい。
そんな「きもの」と「おび」を提案いたします。

受け継がれてきた技と伝えるべき美意識、

火は木を燃やしエネルギーを生む
火は土と交わり器を生む
火は金を鍛え鋼を生む
そして　火は水で静まる
自然の循環　生の根幹　五行の中に人の生きる知恵が宿る
炎　立ち昇るエネルギー
そして水　静めるエネルギー
両極にあり　互いを支えあう　二つのエネルギー
自分の中に眠る知らない私　反対側にいる私を見つけてみよう
近くて遠い　遠くて近い
洋と和　和と洋
対極にあるようで実は同じ　対極にありながら和する
知らない自分に出逢う旅へ　さあ出掛けよう
Flame　Splash　二つのエナジー



紅 京都丸紅株式会社

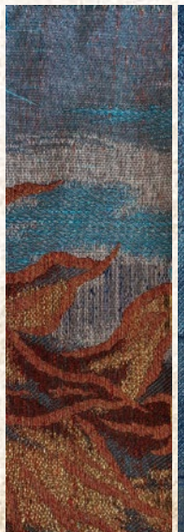
×

Flame Splash

京都・西陣の町で
“時に耐える美しさ”をもつ織物を生み出すという
理念を創業の原点とする「桝屋高尾」。
伝統の技を継承し研鑽する一方、
独自の技術で作品を生み出してきました。

この度、京都丸紅と取り組んだ「Flame Splash」は
火と水をテーマにした新しい出発です。

織物のタテ糸とヨコ糸の組み合わせを組織といいます。
そこに生み出される色であり、美しい色彩の表現を追求し、
未来へつながる美意識を発信していきます。



日本を巡る
きものと出会う

「京都」

京友禅　上野家

豪華で様々な染織技法を駆使した京友禅の中で、
友禅の美しさのみに拘り、独自の世界を築き上げてきた
京友禅の名門「上野家」。

龍村美術きもの

1894年創業の
㈱龍村美術織物と取り組んだ
「伝統と革新」をコンセプトにした
きものブランド。

訪問着：上野街子・作
袋帯：紋屋井関

友禅楊子糊

やさしく、力強く…
自然な動きで楊子を操りながら
生地に糊を置いていく。
親子二代が情熱をかけて復興した
江戸時代の至宝が、
三代目に受け継がれていきます。

JAPAN MODE

全国の紬産地の白生地に、
京友禅の染色技術を取り入れ、
モダンな紬の世界を表現します。
素材感を生かした都会的な
キモノスタイル”です。

紋屋井関

井関家は五百年の歴史をもち、
公家や将軍・大名たちの装束を織る「御寮織物司」として
宮廷文化を彩る逸品を織り続けてきました。
その歴史が育んだ優れた技術と意匠の集大成を、
是非ご高覧ください。

訪問着／袋帯：龍村美術きもの

勝山織物

京都・北山の山裾深くにある
周山に工房をもつ「かつやま」。
盆地特有の風土が手織り工芸に
適しているというこだわりです。
「かつやま」の独創的な逸品帯の数々を
ご高覧ください。

結城

結城紬

本場結城紬が国の重要無形文化財に指定されて60年を経た今、ますますその価値と魅力は増しています。

有松

竹田庄九郎

２０１９年には「日本遺産」に認定された「有松絞り」。４００年以上の歴史を持つ精緻な伝統の手技をご高覧ください。

Furisode

振袖

お嬢様の記念日を
彩る振袖

伝統の美しさを求め、
大切に仕上げられた逸品振袖からブランド振袖まで、
一堂に取り揃えております。

石川

加賀友禅

江戸時代中期から金沢で独自の発展を遂げた加賀友禅。落ち着いた色と精緻な柄を特徴としています。また、作家の感性や創造性を表現した作品も数多く作り上げられています。

牛首紬

光沢があり、弾力性の強い座繰り糸で織られた牛首紬。ネップが多く、野趣に富んだ優雅さと素朴さが特徴。その強さから、別名「釘抜紬」とも呼ばれます。

訪問着：中正亨子・作

東京

東京友禅

僅か数軒しか残っていない東京友禅。なぜなら、最も古典的な染色を用い、高度な技術を要するから。江戸のこだわりと粋を表現しています。